

ペシャワール会報

No.74

ペシャワール会
大名一丁目10-25 上村第一ビル三〇七号
電話 〇九二(七三二)二三七二
FAX 〇九二(七三二)二三七三



表紙をめぐる小さな物語 マンガルの族長ザイトウン

悲憤超え、希望を分かち	中村 哲
熱帯医学の国際学会に参加しました	仲地省吾
イードで小額紙幣が足りない!	中山博喜
どれも無骨であたたかみのある手ばかりなのです	馬場哲司
貧しくとも心清き人々	目黒 丞
遺族に届けられた誠心のザカート	藤田千代子
英語交じりのウルドゥー語で苦戦しています	坂尾美智子
アフガニスタン——百年一日の如き国	高橋 修
挑戦続くパイロットファームにて	橋本康範

ペシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

———— ペシャワール会インターネット ————

ホームページ <http://www1m.mesh.ne.jp/~peshawar/>

電子メール peshawar@mx.b.mesh.ne.jp

悲憤超え、希望を分かち

オキナワ平和診療所、来春完成へ

ピース クリニック

この間の激変を思うと、やり切れぬ思いにとらわれる。いったい我々はどこに向かおうとしているのか。いったい誰がこの責任を取るのか。悲憤を抱えることにも疲れた。確かに私たちが関われるのは、広大なアフガニスタンのごく僅かな地域である。それでも、このような情勢であればこそ、心ある人々の真心を集めて力とし、最後まで踏みとどまって事実を見つめ、変わらぬ希望を分かち合いたいと考えている。

PMS（ペシャワール会ジャパン・医療サービス）総院長

中村 哲

緑の大地計画――

三十五万人の離村防ぐ

アフガン空爆とタリバン政権の崩壊から一年が経過した。何から述べてよいか分からない。ただ、テロ戦争と言う名の国家的暴力による、取り返しのつかぬ結末の中で、人々とおろおろするばかりである。アフガニスタンは過去最悪の状態となっている。

本年開かれた「アフガン復興支援・東京会議」は、空爆と同様、その見直しを迫られている。帰還難民は十一月現在で一七〇万人と報ぜられたが、その大半が寒風の中で依然として餓死や凍死と隣り合わせに暮らしている。ISAF（国際治安援助軍）はカーブルにだけとどまり、米軍は増派を余儀なくされ、新政府の整備も遅々として進まない。地方軍閥の抗争は、私たちペシャワール会PMSの現地事業に多大の影響を与え、新情勢の中でさまざまな困難に直面している。

とはいえ、指をくわえて傍観している訳にはいかない。「緑の大地」計画は、長期的な視野で継続されている。作業地は八八三ヶ所（十一月末現在）、年内に九〇〇を超える。これによって、約五〇ヶ村で三十五万人が故郷



ダラエ・ビーチ（オキナワ平和診療所）の予定地で長老に説明する中村医師

崩壊する秩序の中で

につなぎとめられている。灌漑用井戸の建設、カレーズの再生は、ダラエ・ヌール溪谷で計二万人以上の人々の定住を可能にした。

医療面では、六月に復興援助ラッシュを見



建設中の「オキナワ・ピース・クリニック」(ダラエ・ピーチ)

届けてカーブルから全面撤退し、東部の診療所に力を注いでいるが、苦戦を余儀なくされている。PMS診療所は非バシトゥンの山岳民族が住む地域が多いが、軍閥同士の抗争によって、奥地まで秩序の弛緩が始まり、ジルガ(長老会)の統制が弱まっているからだ。

また、ベシヤワールのPMS基地病院でも、大量のアフガン人職員が他のNGO・国連事業に高給で引き抜かれ、奥地の診療所勤務は殆ど隔月になっている。その上、追い詰められた住民たちは気がたつてきて、いざこざが絶えず、医療職員は安全性に不安を抱いている。十年前と同様、PMS連携の自衛団の組織化さえ考慮せざるを得ない状態である。

しかし、この悪条件にもかかわらず、古参のアフガン人医師を中心に、診療そのものは淡々と続けられている。さらに日本人ワーカー候補が次々と到着し始め、PMS基地病院の質の改善が行われようとしている。ダラエ・ピーチ溪谷のオキナワ平和診療所は四月までに完成の見通しとなった。

農業計画は、年内に試行段階を経て、次の飛躍に備えようとしている。灌漑用水整備に伴う試験農場の地味な取組みは、やがて底力を地域に与えるだろう。

タリバンの立場に 立たされた米軍

アフガン情勢は、いよいよ複雑である。諸外国がアフガン問題に消極的な態度をとり始め、米軍が自ら地方の治安維持と民政への関

与に引きずり込まれている。UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は、「東京会議で過剰な期待を持たせて、膨大な難民帰還を誘ったが、後はどうなるのか」という批判的なコメントを発している。各国NGO、国連機関は米軍の民政関与に批判的である。だが、肝心のアフガニスタンの声はどうなのか。実は彼らは、タリバンを受け入れた時と同様、「誰でもいいから平和にして食えるようになればよい」と考えている。「軍閥よりは外国軍の方がマシだ」という声が多くなっているのは事実である。誇り高い「耕す狼たち」も、それほど追い詰められているのだ。

一年前、ひとつの秩序を破壊した後何があるのか、国際世論の考えが余りに浅はかだったと言わざるを得ない。早魔で逃げ出していた人々の突然の帰還で人口が増え、民心が著しく動揺し始めている。出稼ぎ失業者の群が突然村々に戻ってきたからである。そして、米軍の支援で力をつけた軍閥が、彼らに影響力を持っている。共産政権が崩壊した九二年の状態によく似ている。

事態を切実に感じる外国人は、おそらく前線の米兵たちだろう。彼らは九四年のタリバンの立場に立っていることに気づき始めている。ただタリバンと異なるのは、米兵が

外国人の異教徒たちで、やがては去る行きずりの宿敵だということである。

復興ブームの帰結、

薄れる親日感情

無責任な「報復爆撃」と「アフガン復興ブーム」の結末を、今こそ率直に見るべきであ



村の子供たち

る。今この火急の事態で、もはや敵・味方を問わない。官・民・軍を問わない。安全と生存を保障するものなら、「誰でもよい」のだ。明日の命も分からね者にとつては、「反米」や「親米」も、同様にうつろなスローガンに響く。

あれほど親日的だった一般庶民の間で、少しずつ日章旗の輝きも色あせ始めている。「アフガン復興支援・東京会議」への期待感の反動である。そして、心ある人々の思いをよそに、顔のない「国際的関心」は次の標的に足早に移ってゆく。国家は広告代理店ではない。日本もまた「東京会議」によって、無責任な「顔なし」ではあり得なくなった。事態を虚心に総括すべきである。

* * *

この間の激変を思うと、やり切れぬ思いにとらわれる。いったい我々はどこに向かおうとしているのか。いったい誰がこの責任を取るのか。悲憤を抱えることにも疲れた。確かに私たちが関われるのは、広大なアフガニスタンのごく僅かな地域である。それでも、このような情勢であればこそ、心ある人々の真心を集めて力とし、最後まで踏みとどまって事実を見つめ、変わらぬ希望を分かち合いたいと考えている。先は長い。



中村哲（なかむらてつ）

九州大学医学部卒。専門Ⅱ神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の診療所勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都のベシヤワールに赴任。以来十八年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、主に貧民層の診療に携る。九八年には基地病院PMSをベシヤワールに建設、パキスタン山岳部に三つの診療所も併せ持つ。一九八六年からはアフガン難民のためのプロジェクトを立ち上げ、現在アフガン無医地区山岳部に三つの診療所を設立して、アフガン人の無料診療にもあたっている。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、辺境山岳部へも定期的に移動診療を行っている。二〇〇〇年からは中央アジア、特にアフガン国内を襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。2000の水源確保を目指す）事業を実践。さらに今春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地」プロジェクトに着手。昨年度の診療数約29万人。

*ワーカー通信

熱帯医学の国際学会に
参加しました

PMS医師

仲地省吾

十一月二十日から二十二日まで、タイのバンコクでJoint International Tropical Medicine Meeting 2002という国際熱帯医学会がありそれに参加してきました。当院からも演題を一つ持っていきました。演題名はClinical features and early diagnosis of typhoid feverというものです。当地では腸チフスが風土病のようになっていて、夏にはたくさんのお客さんが当院に入院してきます。ほとんどが小児患者さんです。

腸チフスとはサルモネラに属する菌によって起こる感染症です。日本では今ではもちろん経験することのない感染症です。腸チフスは早期に診断し適切な抗生物質を投与すればほとんど完治しますが、治療が遅れると重篤な合併症（腸穿孔や全身感染症など）を起し、死亡することもあります。

ただ早期の腸チフスは高熱以外にこれといった特徴的症状に乏しく診断に苦慮します。確定診断

は血液培養でできますが、この検査は時間と金がかかり、当院のようなNGOの医療機関ではあまり実用的ではありません。幸いに当院では腹部超音波検査器を保有しており、腸チフスの患者さんは高率で腸間膜リンパ節が腫大していることを発見していました。

腸チフスの病態から考えるとこれは当然のこととなりますが、三、四年前からすでに実際の診断に役立てていたというのは当院の優れた業績の一つだと思います。これは以前赴任していた小林先生が現地医師達に指導し根付かせた実績の一つです。

今回私は多数の腸チフスの患者さんに実際に血液培養を実施し、医学的に確定できた腸チフス患者と腹部超音波による腸間膜リンパ節腫脹の関連性を調べました。それによればやはり腸チフスの患者さんには超音波によって高率で腸間膜リンパ節腫脹を描出できることが証明できました。演題では、腸チフスの早期診断として超音波による腸間膜リンパ節腫脹の描出の有用性を強調して発表しました。

初めての国際学会でしたが、演題内容はベシヤワール会の英語のプロの松岡さんと沢田さんの協力、そして中村先生の指導も得て無事に発表することができました。尚スライドはベシヤワールで作成するのが困難なことが判明し、直前になってから日本にインターネットでスライドファイルを送り、スライドになったのを、ちょうどベシヤワ

ールに来るワーカー（藤野さん）に持ってきてもらうという芸当もしました。

今回の学会には現地医師のDrヌールアガを同行させました。現地医師団の中でも最も優秀なリーダーの一人です。国籍がアフガニスタンでもあるためか、タイ入国のビザを取得するのに大変苦労しました。早々と学会からの招待状や主催大学であるタイのマヒドール大学の招待状なども得ていましたので、簡単に取れるだろうと思っていました。タイ大使館の回答は「アフガン国籍者についてはタイ外務省からの入国許可が必須」とのことだったので、大変驚いてあわてました。学会関係者と何度も連絡を取り、いろんな書類を送りましたが、なかなか許可が出ず、一時はあきらめていました。外国の学会に連れて行くなどと期待を持たせて悪かったかなと思っていたところ、なんと出発の三日前にタイ外務省から入国許可が来て、タイ大使館に出かけてビザを取得したのは出発の前日でした。

学会とそれから短いながらもDrヌールアガとのバンコクの観光旅行は多少のハプニングもありながら、とても楽しく有意義でした。Drヌールアガのビザの取得に尽力してくれた学会関係者にももちろん丁重にお礼をしました。Drヌールアガは多少のカルチャーショックを受けていた様ですが、当院の将来のリーダーとしてとても良い経験になったのだと思います。そして、このように外国での国際学会にも参加できたということは他の医師団やPMSスタッフにも励ましになったのではないかと思います。

イードで少額紙幣が足りない！

PMS会計事務担当

中山博喜

現地の「お年玉」

イード（断食明けの祭）の季節がやってきた。この時期の人々の過ごし方は日本で言うところの「お正月」と同じである。イードにはほとんどの人が実家に帰郷する。PMS病院も例外ではない。病院のスタッフはもちろんのこと、入院している患者さん達でさえもほど重症でないかぎり帰ってしまう。そんなわけでイード休みの間、病院内は数名の患者さんと医療スタッフ、そして若干名の事務スタッフだけのガランとした状態になる。

イードの前になると新しい服や日用品を求める人々でバザールは凄い賑わいを見せる。みんな甘いものを食べる習慣があったりするので菓子屋の店先には菓子を入れるための箱が山のように積み上げられ、人々が長蛇の列をなして買っていく。正月の「お年玉」のような習慣がこちらにもあって、子供達にお小遣いが配られる。現地スタッ

フ達の行動から推測するに、年齢にもよるだろうが子供一人につき五から一〇ルピーあたりが相場のようなのだ。このお小遣いには新札を使用することが望まれているようである。

現地会計の職に就いて一年、このあたりの習慣を熟知していなかった私であるのだが、この「お小遣い」がPMS会計室において思いもよらない問題となった。

嬉しくない大誤算！

病院がイード休みに入る二、三日前から、大きな金額を五ルピーや一〇ルピー紙幣に両替して欲しいという依頼がスタッフ達から出始めていた。通常五ルピーや一〇ルピーという値のお金は、釣銭で渡そうとすると嫌がられたりするくらいの紙幣であって、このような両替の要求は溜まりに溜まったそれらの紙幣を整理出来ることもあり、歓迎すべき事である。しかし今回は違った。嬉しい、いや、嬉しくない大誤算、要求の量が多すぎて病院の五、一〇ルピー紙幣がほとんど無くなってしまったのだ。確かに大量には必要としない紙幣ではあるが、それなりに要る。気が付けばボロボロの紙幣だけが引き出しの中に残っていた。それでも尚スタッフ達からの両替要求は続く……。

スタッフ「五〇〇ルピー分の五ルピー札が欲しいのだけれど……」

会計「……無い」

スタッフ「それじゃあ一〇ルピー……」

会計「……それも難しい」

スタッフ「……」

「しょうがない、会計室にも必要なことだし」ということで銀行に両替に行こうと決意した……のがいけなかった。他にも幾つか用事があり、それらの仕事もかねてイード前で混雑している銀行へと足を運んだ。

銀行もイライラ

結果から先に言ってしまう。銀行にも無かった。行員の話によると、昨日と今日だけで六〇万ルピー分の両替要求があったらしく、銀行側もお手上げなのだという。とくに銀行が閉まっている時間にもかかわらず、続々とやって来る両替目的の人々（我々はこの時間を指定されていた）を前に、行員も怒りを露にしてお客達と衝突していた。銀行側は「お得意さんだから」ということで、引き出しに大事に隠してあった新品五ルピー札一〇〇枚の束を、中に入っていた三束全て我々に渡してくれた。申し訳ない気持ちでイッパイになりながら行員と握手をしてその場を去ったのだが、その時の行員の握手には、かなりの力が籠っていた。

五ルピー紙幣到着を「今か今か」と待ち焦がれているスタッフ達。銀行に行つたのだから、皆が希望するだけの紙幣を運んで来てくれるに違いない、なんて思っているんだらう、と彼らの顔を思い浮かべながら、全くもって要求に満ち足りない三〇〇枚の五ルピー札をボーンと見つめる。私を乗せた車は、買い物客でごった返すバザールの中を、クラクションをガンガン響かせながら「いざっ！」PMS病院へ戻って行く。

どれも無骨であたたかみ のある手ばかりなのです

ジャララバード事務所 馬場哲司

一日で百人以上と握手

私がアフガニスタンのジャララバードに来て、もうすぐ三ヶ月。風が吹き、雲をよび、季節は夏から秋へそして冬を迎えようとしています。町から見える山々はすでに雪をいただいており、朝焼けに照らし出されたその姿にしばし心を奪われます。ごつごつした岩峰は、雪雲をすくいとり、恵みの水をもたらししてくれます。無愛想におもえた岩山の風景も、どこか、硬くて無骨なアフガニスタンの人の手を思い起こさせ、親しみがわいてきます。

現地スタッフや建設作業員の人々にお給料を手渡しに行くとなった一日で百人以上の人々と握手することになります。子供からご老人まで、小さな手から大きな手まで、様々な手と、何百回と握手を繰り返します。相手の反応は人それぞれです。せめて握手だけでもと思い、力強く握ってみると、さも迷惑そうな表情をする人もいれば、両手で握り返してくる人もいて、その正直な反応は、嫌味

が無く、どこか人間くささを感じる瞬間です。

ただ一つ言えることはほとんど言っていないほど柔らかい手の人がいないということです。ぎゅっと握り返してくる、ふしくれだった手は、硬くて無骨ではあるけれども、あたたかみがあり、かえって私をばねましてくれました。

人間を信じあうなら、人間と人間とが接触する事がまず必要なのである”とは私の恩師の言葉です。そうはいくもの、はじめてみるアフガニスタンは、人も自然も計り知れない何か異質なものに感じられ、まったくくえらいところに来てしまった”というのが臆病者である私の正直な気持ちでした。町から見える岩山には草木一本生えておらず、どこか無愛想で無表情に思え、緑豊かな日本の山々が懐かしく思えてなりません。アフガニスタンへ来た当初、国境の町ではろをまとった人の群れを兵士がムチで追いたてる様子や、農夫が用水路で大根を洗うその直ぐ隣に地雷原が広がる光景が、戦争で傷ついた人々が、しばらく頭から離れませんでした。はじめてみるジャララバードの町は埃が舞い上がり、ぎらぎらした目の人の波に飲み込まれそうで、圧倒されるばかりでした。

「ババ」違い？

不安な思いでジャララバードのオフィスに出た初日、髭の濃いぎょうろとした目の現地スタッフにかこまれ、「私はババです。よろしくお願いします」と挨拶してみると、一同何かニヤニヤした様子。聞き取れないパシュトゥー語の会話の中に

「ババ」「ババ」という単語がでてくるので、訳を尋ねてみると、「ミスター、ババ」と言うのはこっちの言葉で「おじいちゃん」という意味なんだよ、全く傑作な話だ、あつはは」と笑っている。まさか私の祖先さまも、遠く離れた異国の地で、子孫が「おじいちゃん」と呼ばれるとは思っても見なかったことでしょう。

それ以後、私の顔を見るなり現地のスタッフは「おじいちゃん元気ですか」と必要以上に呼びかけてくる始末。一見強面の男達は、実は冗談が大好きだと言う事を、私はこの時初めて知ったのです。

たとえ時間はかかっても

「おじいちゃん元気ですか」。ほこりが舞い上がる夕暮れのジャララバード、以前は恐ろしくさえ思えた風景の中にもよく見てみると、道脇の小さな木陰で大柄のババ（おじいさん）が小さな赤子を膝に抱いて寝かしつけていたり、子供達がまるで土から生まれてきたかのように泥んこになって遊んでいる、そんなやさしい風景に出会います。

何かが異なるというのは前提としても、このの本質は「人」と「人」との関わり合いであり、たとえ時間はかかったとしてもどこかしら互いに通じ合うものを感じ取れる、そんな当たり前のことを再確認する三ヶ月であったように思います。

人のあたたかみを感じながら仕事が出来た事に感謝して、アフガニスタンでの時間を大切にしていきたいと思います。

貧しくとも心清き人々

アフガン・プロジェクト現地責任者

目黒 丞すけ

イメージほど危険ではない

いつも応援してくださっている皆様、お元気でしょうか。私は現在、日本でこの原稿を書いています。一時帰国で戻りました。

帰国して友人などに会うといつも必ず「危ないのか?」「治安は安定しているのか?」「撃たれたりする危険はないのか?」と聞かれます。やはりアフガンニスタンというと特に危険な国というイメージがあるのでしょう。

しかしながら私自身は現地アフガニスタンをそれほど危険な国だとは思っていません。確かに日本とはまったく違う国であり、日本で当たり前のことをそのまましてしまうと、かなり危険です。日本には日本のルールがあり、アフガニスタンにはアフガニスタンのルールがあります。日常的な細かい事さえ知っていればアフガニスタンは危険な国ではありません。現在も戦闘が続いている場所や、地雷や不発弾がある場所もありますし、治安の悪い地域もあります。どの場所には近寄ってはいけない、どの場所では何をしたらいけないな

ど、注意するべきことを守ればかなり危険は減ります。私はそれ以上に日本で滞在中に交通事故に遭わないだろうかと危険を感じています。日本のほうが予想外の危険が多いように感じています。

ひるがえって日本を見れば……

現地アフガニスタンでもラジオの短波放送で日本のニュースが聞けます。時々ですが現地でも聞いていました。アフガニスタンでは毎日のように戦闘など悲しい出来事が続いています。日本から届くニュースも私にとって同じくらい悲しいものが多いです。むしろ日本のニュースのほうが病的な事件が多いように感じます。今に始まったことではありませんが、隣人が孤独に病死してもそれに気付かない周囲の人々や、親が子供を虐待し、子供が親を殺すなど、久しぶりに戻った日本で流れるニュースは以前よりも社会が病んでいる事を示すものばかりでした。

タリバン時代ではほとんど無かった事ですが、現在のアフガニスタン政府の役人達は露骨に賄賂を要求してきますし、横領なども当然のように行われています。我々のスタッフでもきちんとした管理が行われなくなると不正をするかもしれません。しかし私には彼らを憎むことができません。彼らの生活状況を知っていますので、家族を養うために必死なのだろうとしか思えないのです。だまされるほうが悪い、不正をさせてしまうような管理をするほうが悪いと思っています。

しかし日本での脱税や横領などの不正は金額のケタがアフガニスタンとは違いすぎます。罪を犯



灌漑水路を視察する中村医師、藤田さん、目黒さん

していることには変わりはないのですが、家族を守るためなのか、当然の権利のような顔をしているのかでは意味が違うように感じてしまっています。

数百円の薬も買えず

アフガニスタンの、四年も続いている旱魃の中で、私達が活動しているニングラハル州ではほと

んど餓死がなかったと聞きます。食料は絶対的に不足しています。しかし現地の地域社会ではひとつの家が飢えに直面すると周囲の家が必死に助けます。体面や誇りを重視する人々です。表面的には行われませんが、夜間にそつと食料を届けたりして助け合うそうです。いよいよ状況がひどくなつたときに「これ以上回りに迷惑をかけられない」と難民になっていったのです。餓死ではなく清潔な水の不足による下痢や栄養失調から起こる病気などの二次的な死亡原因がほとんどだったそうです。

アフガニスタンでは本当に簡単な病気で多くの子供達が毎日死んでいきます。軽い命など決してありませんが、あまりにはかない死が多すぎるので悲しくなります。少しの余裕があれば買えたはずの薬が手に入らなかったために死んでいく人が本当に多いのです。ベシャワール会が運営する三ヶ所のクリニックの周囲の人々は幸せだと思えます。歩いて二日かかる所から来る人もいますが、広大なアフガニスタンには医者という人種に出会った事がない人々も多くいます。数百円の薬を買えないために死んでいくのが当たり前になっている人々がいるのです。

悲しいアフガン、おかしい日本

帰国してから親戚に聞いたのですが、今の日本では借金に追われた経営者が保険金でまかなうために自殺することが多いとの事でした。アフガニスタンの状況は「悲しい」と感じますが、日本の状況を見ると「おかしい」と感じてしまいます。

少しのお金になかったために命を失う人々がいるのに、カネのために命を売る人がいるなんて考えたくありません。

生活に窮するほど貧しくても優しい人々と、モノはあっても心が貧しい人々のどちらが良いかなんて比べられることではありませんが、今の日本は悲しくなることが多すぎます。終わりの見えない不景気の中、心のつながりが希薄になっていきやすい日本の社会ですが、それでも会員の皆様からのご支援で、アフガニスタンの苦しんでいる人々が命をつなぐことができます。この優しさが日本の社会を染めていくことができるように、二〇〇三年こそはみんながもつ笑顔になれるように祈っています。

これからも変わらぬご支援をよろしく願います。

▼お願い▼

＊ご寄付をお送り頂いた郵便払い込み用紙の、皆さまの住所・氏名が判読できないことが時々あり、処理に苦慮しております。ご住所・ご氏名はできるだけ分かりやすくご記入頂ければ幸いです。

▼寄附をしていただく皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、御願いたします。

表紙をめぐる小さな物語 36

マンガルの族長ザイトウン

甲斐大策

床に置いたランプが、広間の隅の隅を照らす。部屋の最奥に坐せられた六人の訪問者と向き合うマンガルの族長ザイトウン・ハーンは、胸を張る。「夢ではない。私は子供だった。ラマダンの七日目が終り、八日目の始まりの満月が昇った寒い夜、ニイカー（祖父）と一晩中、この眼で見ていた……」

この日の午後、アリヘルの族長の次男ザリーフが、自族の三人を伴い、UNマークの車で現れた。村外れに、客の東洋人と若い者一人は残した。一泊の許可を望む、その後はハリス派の前線に参戦する、ランチャー他の火器を携えている等々を語り、羊二頭と小麦粉ひと袋を差し出した。

一時間後、若い者十五人を背後に従え、ザイトウンは東洋人を含む六人の訪問者と対面した。ザリーフとその東洋人から旅の理由をより詳しく引き出したかった。国連の車を私有しているのも妬ましく、どうすればそうなるかをいぶかって見せた。

「ハハハハ、ジャラーラーボードのシンワリから巡り巡ってきて私のものになった。色々あったがね……」

ザイトウンの祖父は、八十余年前、ナードイル・ハーン將軍が、英軍をテルへ追撃した戦いに参加した折ザリーフの曾祖父に生命を助けられた戦いを感じてきた。以来、隣部の族アリヘルにマンガルは負い目を感じてきた。大笑するザリーフは、ザイトウンは、無礼だったり企みがあつたら、喉掻き切つて埋めてしまえばいい、と意気込んだ自分が弱気になるのを感じていた。そんな時、陰謀きだという東洋人が口を開いた。

「ここには、大昔の遺跡とか仏塔とか、または、不思議な云い伝えとか……」

「遺跡はひとつ、大きいのがある。また、神の軍のナム・アッラム（神秘的）な話が……」

アリヘルへの対抗意識と自族の若い者の手前ザイトウンは、太っ腹な族長を示すかなくなっていた。大きく息をつくとき、茶を運ばせ、自らの体験を語り始めてしまったのだ。

「祖父と私が坐っていた岡の下、何百何千という甲冑をまとった騎馬軍が、月光の下、進んだ。祖父と私は後を追うが、先へ先へと動く。蹄の音がしないし、土埃が立たない、……浮いているんだ。しかし、馬具の音は……」

ザイトウンは忽ち自分の話に滑り込み、訪問者とのやりとりで自族の損得を計る緊張は消えていった。若い者の何人かは肘をついて横になり始めた。

＊バクテリア州とその北方のパシチュン部族名。

遺族に届けられた

誠心のザカート

PMS院長代理・看護婦 藤田千代子

イード

十一月七日から始まったイスラム教徒の断食が終わり、ベシャワールでは今月六、七日にイード（祝祭）を迎えました。公的機関は五日からのイード休暇が始まり私達の病院も四日間の休暇を設けました。帰郷するスタッフもいれば、来年結婚する予定で休暇を長期に取りたい為にイード休暇中勤務を希望するスタッフもいて、日本で勤務しているところ、正月休暇期間中の勤務者を決めておられた病棟婦長さんの事を懐かしく思い出しました。

キリスト教徒にとっては二十五日のキリスト生誕日の方がこのイスラム教徒のイードに匹敵する大切な日ですので、イード期間中会計職員三名、看護部二名、薬局一名のクリスチャン達は通常の勤務をします。私達日本人は大多数がパキスタン政府に合わせてイスラム教徒と同じくイード休暇を取りゆつくり過ごしました。

イードは殆どの患者さんが家で過ごすため、二

日ほど前から退院して行きますが、どうしても帰れない重症患者と高い交通費を払って遠方から来て入院しているらしいの患者さん達が数名病院に残り、病院は大変ひっそりと静かになります。今年は病院に残る事になっていた子供もとうとうイードの前夜に退院して行き、らしい患者さんだけが七名病棟に残りました。

イードの二日間の病院食は勤務者と患者さんの為に馳走が準備されました。と言っても鶏肉に（鶏肉は高価でPMSでは年に三回の大きなお祝いの時しか使わない）フルーツ（りんごとバナナを交互に）そしてパキスタンでお祝いには必ず出されるミタイ（油っぽい甘い菓子）です。

今年は日本人ワーカーの一人が、病院でイード迎えないならなかった患者さんの為に、セーターとバト（女性が通常使用するシーツ大のシヨールの男性版）をプレゼントしてくれました。その日の夜勤者が話すには、イード前は一ヶ月間の断食がやっと終わることもあり、皆嬉しくて何処もイードを迎える準備で忙しく、更にイード前夜はあちこちで祝砲が打ち上げられ続けているのに病棟はシーンと静まり返っていた、そんな所に贈り物が届いたので病棟がしばらく明るく楽しくなりました。

ある小児患者の死

断食も後数日で終わりこのイードを迎える寸前に貧血で入院していた子供が死亡退院しました。送り出した後主治医から死亡した子供の父親は日雇い労働者で大変貧しく、子供の治療にお金を使



い果たしイードを迎える余裕もない、更にこれから葬式をしなければならないので病院からこの家族の為に三〇〇〇から五〇〇〇ルピー程援助金を出してもらえないだろうか、他の職員もザカート（布施）をすと言っている、と院長補佐のジア先生を通して話が来しました。私もその子供を知っていたし、大声で泣きながら子供を連れて帰った母親を見ていたので気の毒でたまりませんでした。

しかしせっかく職員がこの家族の為にザカートをすると言っている所に、病院から全てを援助する事にやや躊躇しましたのでまず職員がどのくらいをザカートとして準備できるかを見せて欲しいと伝えました。

予想上回る「ザカート」

ところが私の予想をはるかに越えた三五〇ルピーものザカートが集まりました。公共物に全く責任感のない病院では文房具、小医療器具の紛失や不注意による破損は各部署全員がその責任を負い彼ら自身で同じ物を補充することに決めています、これまでの経験から現地職員の財布のしまりの固いことを知っている私は、会計への支出依頼表を準備して職員によるザカートの結果を待っていましたので、この額に大変驚かされた感動しました。この職員達が裕福な生活をしているかと言うと殆どの人がそうではないので、余っているものを差し出したのではなかった事を私は知っています。彼らは自分の目で見て誰かに助けが必要だと感じると彼達の出来る範囲をやや超えてでも助けるのではないだろうかと思いました。これがいわるイスラム教徒のザカートかとしみじみと感じました。この病院職員ひとりひとりの気持ち、子供を亡くした家族の気持ちをほんの少しでも和らげられる事を願いました。

昨年から大変心の痛む出来事が続きましたがその痛みを共に感じてパキスタンやアフガニスタンでの私達の仕事を支援して下さい多くのの方々を知り大変感謝しています。

英語交じりのウルドゥー語で 苦戦しています

PMS検査技師 坂尾美智子

今年の七月末からPMS病院で検査技師として働いています。

日本で実施されている検査項目の大半が当検査室でも行われていますが、一つ一つの内容や方法は全く違っています。例えば糞便検査は日本では癌検診として潜血反応がメインですが、こちらでは虫卵や原虫の検出がメインです。そして又陽性例がとて多く、毎日何かの虫卵や原虫を見ます。血液検査もマラリア原虫の検出が主要な検査となっています。他にも一般的な白血球数やヘモグロビン(貧血)などの検査もしています。

日本では殆どの病院が生化学や血液はオートメーション化されていますが、こちらでは現在は一つつつ手でやっています。ザリーピーベットの使おうとして老眼の進行に驚かされ、早速バザールで遠近両用眼鏡を七〇〇ルピー(約一四〇〇円)で買い求めました。

英語力には元々自信がなかったのですが、現地に來てみて自らの語学力不足に落ち込む日々です。検査室はパキスタン人二名、アフガン人八名と私

の構成で、検査室の日常会話はバシントン語で進んでいます。私は怪しげな英語交じりのウルドゥー語で苦戦しています。しかし検査室のスタッフがなんとか聞いてあげよう、会話しようという姿勢で接してくれるのでとてもありがたいです。

最近、朝のミーティング後の学習会が定着してきましたが、英語中心になり現地スタッフでも英語力の差で苦労しています。現地の教科書は文字ばかりで親切な本ではありません。自国語の本となるときに貧弱です。日本ではカラー写真をふんだんに使った自国語の専門書で学習できますが、それはとても恵まれたことだったのだと知りました。ガラス製品なども壊れやすく、ちよつと力を入れただけで割れたり、ものさしであるザリーピーベットの狂つていたりとなかなか油断できません。

とまどいの中のスタートでしたが、気のよい現地スタッフに囲まれ楽しく仕事をしています。中身のある会話ができれば更に楽しく充実した仕事ができる筈と努力しているのですが……。いつかこの実が実るときが来るだろうと信じたり、諦めたりを繰り返している間に、暑い夏から寒い冬に変わりました。あの美味しい美味しいマンゴージュースに出会える時には少しは進歩しているかしら。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

*会報の発送費に、年間百万円以上がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです(古切手不可)

*「緑の大地計画」試験農場レポート

アフガニスタン――

百年一日の如き国

農業指導員 高橋 修

「歴史」と「伝統」

私たちが農業計画を進めるに当たって、いくつか気を付けていることがあります。

その第一は、アフガニスタンの農村社会に深く息づいている「歴史」と「伝統」を大切にしなければならぬということです。

例えば、農村社会はジルガと呼ばれるムラの長老会が秩序維持の要となっており、またそれぞれの家では、すでに現役を退いた年長の男子が厳然として一家を取り仕切っています。いつの頃からジルガが存在し、また家長制度が採られてきたのか分かりませんが、恐らく原型はシルクロードの昔から、厳しい自然と部族間の闘争に耐え抜くために生まれてきた制度なのでしょう。もし私たちがジルガを無視したムラの取り決めに関わったり、家長長の意見を軽視して若者の考えだけを重視すると、必ず反動が出てくる恐れがあると判断しました。

第二は、農業経営の姿もまた歴史と伝統が色濃

く受け継がれており、一挙に新しい農業の形と技術を持ち込んでも受け入れられないと考えました。

今年の九月、私は約七十年前に当時農林省の職員であった尾崎三雄さん（故人）が写されたアフガニスタン各地の写真と、農村と農業の状況を克明に記録されたメモを見せていただく機会がありました。その七十年前の写真・記録と現在の状況とを比較すると、全体に緑と花が少なくなっていることを除いて、畑の形も作られている作物も、農具も農作業の仕方、まさに「百年一日の如く」ほとんど変わっていないのです。

第三は、私たちはアフガニスタンにおける農業経験は皆無です。日本とは自然条件と社会的条件が全く異なる現地では、農家の経験と意見を尊重して進めないと失敗すると思えました。

農は一日にして成らず

もともと農業は永年の経験がものを言う仕事です。日本でも農業の専門教育を受けた若者が、就農後すぐに音を上げる例が多いことからもお分かりいただけるでしょう。また農業は、それぞれの土地の気象・土壌・水利などの自然条件とか、資材調達・生産物の販売などの社会的条件に制約されています。いかに新しい作物を取り入れようとしても自然条件に合わないれば収量は上がりません。また自然条件に合った作物であっても、生産に必要な資材が買えなかったり、生産物の販売方

法が無い場合には経営として成り立ちません。農業は、単に技術があればできる、儲かるといった仕事ではないのです。少しくどくなりしましたが、このことはアフガニスタンに限らず日本でも大変重要なことなのです。

以上くどくと述べてきましたように、アフガニスタンの農村社会と農業の現状は、他所者の私どもからすると一見不合理で遅れているように見えますが、アフガニスタンには、歴史と伝統に培われた農村の仕組みと、アフガニスタン流の農業が存在し、農家はそこに自信と誇りを持っています。不合理に見えても、よく確かめてみるとその裏側には必ず何かの理由があります。このため私たちは、日本人の物差しに当てはまらなくても、まず現在のアフガニスタンの農村の仕組みと、農業のやり方を正面から受け止め、そこから徐々に改善していかなければならないと考えてきました。一足飛びに、新しい技術と方法を持ち込めないとここに農業計画の難しさがあると思っています。

それでは次に、農業計画は今日まで何をどのようにしてやってきたかを説明します。

ジルガと協力して候補地探し

まず第一に、パイロットファームの設置と場所の選定から取りかかりました。パイロットファームとは新しい作物とか改良技術を農家に見せるための、いわゆる「展示園」です。この作業は、以前から地域に溶け込んで活躍しておられる目黒さんに進めていただきました。目黒さんによりまし

と、まずダラエヌール渓谷内のジルガに集まって貰って趣旨を説明して基本的な了承を得、設置場所についても意見交換をもらったとのことです。全員大賛成であったと聞いています。その背景には、永年の医療活動と二〇〇〇年七月から開始された水源確保事業によって、ベシャワール会に対する厚い信頼感が培われていたからと想像しています。

続いて目黒さんに行っていたいたのは、パイロットファームの設置場所の確定と担当農家の選定でした。この作業は、水源確保事業に携わっている地元出身の有力スタッフと相談しながら進めてきたことです。このスタッフはムラの中の事情に詳しく、またムラの中で人望のある人材です。

もしベシャワール会が、直接パイロットファームと担当農家の選定を行っていたならば、相当物議を醸し、あるいはパイロットファームの設置は不可能であったかもしれません。

第二に私たちが行った作業は、作物栽培の状況と土壌・水質の実態調査です。私たちは土壌調査を兼ねてダラエヌール渓谷の北から南まで畑を歩き、栽培されている作物と生育状況を観察しました。また現地スタッフ中心に北部・中部・南部で計六戸を対象に、作物の栽培状況について聞き取り調査を行いました。これらの調査の目的は、パイロットファームに入れる作物の種類を何にするか、技術改善のポイントをどこに置くか、技術のレベルをどの程度にするかなどを探るために行ったものです。事前に行った畑の観察結果と重ね合わせ

ていろいろな質問し、実態と問題点がかなり把握できたように思っています。

第三は、いよいよパイロットファームの作付と栽培展示です。導入する作物は、まず地域の重点作物である小麦、玉蜀黍、飼料作物を取り上げました。更に小面積ですが新しい作物として豆類を導入し、また今後芋類とブドウの作付を予定しています。つまり第一段階の重点作物は昔から地域に馴染みのある作物を取り上げ、農家の栽培経験のない作物は小面積に止めるよう心がけています。改良品種の種子・種苗はできるだけ自然条件が似通っているパキスタンから導入しましたが、一部日本から持ち込んだ品種もあります。

栽培技術については専門的になりますので内容を省略しますが、考え方としては、現地調達できない資機材は使わないで、できるだけ現地で手に入る物を利用することとしています。例えば、作物の新芽に着生するアブラムシ（俗名ヌカ虫）の防除のために、農薬を使わずに、タバコの吸い殻二〜三本を一晩水に浸け、出てきた薄いニコチン液を散布して駆除したなど、いろいろと考えながら現地に合った技術を工夫してきました。

水をめぐって

次にパイロットファームでのハプニング・トピックを紹介しましょう。

これまでに一つだけ、現地の習慣に逆らって厳しく対応した事柄があります。それは水の使い方です。現地ではカレーズ（伝統的な横穴式の井戸）から湧き出てきた水を、順次畑に導いて灌水して

いますが、農家のやり方を見ていると、いったん自分の畑に順番が来ると三〜五時間水を入れ続け、相当水の無駄遣いをしています。このため中には水分過剰で根腐れを起こしている畑もありました。もともと水が少ない地域ですので、この際タツプリ灌水しておこうとの心理が働いているのでしよう。折角ベシャワール会が苦勞して確保した水です。上手に言えば今の倍の面積が灌水できると判断し、「灌水は十五分以内に」と喧しく指導してきました。気持ちには理解してくれたようですが、まだ抵抗感が残っているように感じています。

シロアリ騒ぎも

これまでパイロットファームでいくつか困ったことが起こりました。

その一つは、パキスタンから持ち込んだササゲ（現地では大豆の一種になっている）の収穫が近づいた頃、パイロットファームの近くの子供、時



ブドウ園を見学する高橋さん

には大人も混じって、勝手にマメの熟した莢を選んで収穫（泥棒）していくのです。中には堂々と前垂れいっぱいに持っていく子供もいました。もともと親戚とか隣近所が助け合う風習ですのでそれほど罪悪感がないのかも知れません。しかし、私たちがいかにアフガニスタンの風習を尊重すると言っても、これでは収量も分かりませんし、また来年の配付用の種子が確保できませんので、毎朝早く（泥棒の先手を打って）収穫して貰うよう担当農家に頼みました。

もう一つトラブルを紹介しましょう。パイロットファームで飼料作物を播いていたときのことです。苦勞して畑の準備をして種を播き、灌水しやれやれ終わったと思った直後、どこからともなく現れた大型の熱帯シロアリの大軍が、せっせと種

を穴の中に運び込んでいたではありませんか。二三日後見に行きましたら今度は残っている種から出た新芽までどんどんと運び込んでいたのです。もう憎くて憎くて足で踏みつけましたが到底追いつくものではありません。この飼料作物は日本から持ち込んだ種類ですが、こんなところにも新しいことに対する障害が出てくるものだと肝に銘じました。いま農業を使わないで蟻を防ぐ方法がないか考えているところです。

以上のパイロットファームの取組みと並行して、私たちはサイレージの作成を進めてきました。サイレージとは、二―三cmに切った飼料作物を穴の中に詰め込んで乳酸発酵させ、冬用の家畜飼料を確保する大変重要な作業です。アフガニスタンの農家にとっては未知の技術で、また私自身も六十

年前の子供の頃に経験しただけで、農家も私たちも緊張のしっぱなしでした。いろいろエピソードがありますが、残念ながら紙数が無くなりましたのでまたの機会にご報告したいと思います。数百年前から現在まで連続と、昨日から今日と変わることなく続いている悠久の風土の中に、私たちは農業計画と言う一石を投じました。アフガニスタンの歴史と伝統の重み、厳しい自然条件と社会的条件に照らせばささやかな取組みかも知かりませんが、農業計画を通じて少しでも人々の意識が変わり、また中核となってくれる人材が育てば、必ず彼ら自身の手で希望に満ちた農村に生まれ変わると信じています。私たちはその事を夢に見ながら、明日からもまた、自らを励ましつつこの道を歩み続けていきたいと考えています。

挑戦続く パイロットファームにて

緑の大地計画スタッフ

橋本康範

広まる「一服」

今回はあまり表に出ないPMS (Agriculture Project) でのくっつかの出来事を紹介しよう。

畑で広まるある日本語パシュトゥー語で、そして英語で分からない言葉があったとき私は時々日本語を使う。例えばこの間播いた「青梗菜」。現地のファーマーの知らない野菜で、しかも私も英語の名前がわからないので「チンゲンサイ」と教えた。今ではすっかり「チンゲンサイ」で広まっている。その他「アブラムシ」もこれに当たる。

また、私は休憩を入れるとき「一服」の号令をかける。これは別にパシュトゥー語で「チャイ（お茶）」といえは通じるのだが、日本にいたときから外での作業で慣れ親しんでいるこの「一服」を一度使ってみた。この言葉は響きがいいのかファーマーたちもすぐ覚えてくれ今では当たり前のように「一服」が使われている。ドラエニールで

「一服」といって現地の人たちが砂糖を入れた緑茶（アフガニスタンでは緑茶に砂糖を入れるのが当たり前である）を飲むのはなんと不思議な気持ちである。サイト（畑）での仕事終了時は輪になって「本日これまで！」と私が号令をかけ一本締めで終了する。やり始めてからだいたいぶった今でもこの一本締めの後決まって私のパートナー、ワリーやファーマーたちからすがすがしい笑い声が漏れる。

「イングリッシュ、カモン！」

ブディアライ村のファーマー、ミスターアキルシャー。前回も少し彼のキャラクターについて紹介したが、今回はもう少し具体的に触れてみよう。

年齢は五十歳手前で痩せ型だがばねのある体つきでしなやかな動きをする。仕事中心やお茶を飲んでいる間彼が口を開くとみんなすぐに耳を傾けるといった存在感もある。

私がこっちに來て間もないころの話である。当時私はバシウトウ語をほとんど話せず、私のパートナーのワリーも私のバシウトウ語より頼りない英語力という感じだった。つまり作業中の言葉の通信はこの非常に心もとないバシウトウ語と英語だけだった。もちろんアキルシャーは英語を話すことは出来ない。

あるとき、私は片言のバシウトウ語で一所懸命作業について説明していた。ジェスチャーもかなり大げさに交えながら話していたのだが、やはりうまく通じず悩んでいた。困り果てている私に向かってアキルシャーがこういった。イングリッシュ、カモン！両手を広げ、俺に英語で話してごらん、大丈夫だよ」といった感じで満面の笑顔を私に差し向けているではないか！私はそのとき確信した。この男とならうまくやれる、何事もプラスに変えてくれるだろう」と。その後何度か困難にぶつかり、その度に彼の説明や態度を見ていると、ぎつとうまくいくだろう”と考えてしまふ。そして実際のりきつてきた。彼はそのようなよう努力を惜しまないファーマーでもある。

「トライしよう」が合言葉

合言葉は「ゴーシユシバカウー」。「トライしよう」という意味である。事あるごとに私たちはこの言葉を合言葉にがんばっている。レイバーが

雇えなかったとき、私とワリーがいる「ゴーシユシバカウー」、大型のトレンチサイロを使ってサイレージを作るとき、失敗したら肥料にしよう。」「ゴーシユシバカウー」、畑から大量に出た固いとうもろこしとソルゴの根を使って肥料を作るとき（こっちではこれらの根を火を焚くときのスターターとして主に使う）畝を立てて小麦を播種するとき、一つ一つの畑に新しい水路を作るときなども「ゴーシユシバカウー」。

この合言葉の下に失敗したこともたくさんある。しかし、この合言葉によってパイロットファーム（試験農場）は他の畑とは違うんだ、将来のために様々なことに挑戦していかななくてはならないんだ、という意識を互いに持つて日々仕事に取り組

めるようになった。だから常に私たちは前向きである。

しかし、一度だけワリーが困った顔を見せたことがある。それはバイクで二人乗りをして畑に向かっていったときである。前日降った雨で道路が川になってしまっていた。私はその道をバイクから降りずに突っ切ろうとした。後ろでワリーは「牽いて渡ろう」といったのだが、それを押し切つて「ゴーシユシバカウー」といつて突っ込んだ。案の定途中でエンストしてしまい二人とも足が水浸しになってしまった。その時はさすがにワリーもかなり困った表情をし、そこには明らかに「だから言つたろう」という思いが込められていたのだ

2003年カレンダー 完売の御礼とお知らせ

- *2003年カレンダー「天馬訪れる大地」は、会員のみなさまからの予想を上回る予約が殺到し、お陰様で完売となりました。ありがとうございます。
- *発送が遅れておりますが、中にファックスの送信ミス等によって、お名前・ご住所などが不明の方がいらっしゃいます。
- *年末までに届かない方は、大変お手数ですが、事務局までお知らせいただければ幸いです。

Tel 092-731-2372

Fax 092-731-2373

甲斐大策氏の 「表紙をめぐる小さな物語」 が一冊になります！

- *毎号の表紙を飾る甲斐大策氏の「表紙をめぐる小さな物語」が、新たな書き下ろしも加え、石風社より来春刊行されます（仮題『聖愚者の物語』予価2000円）。アフガニスタンの風土が匂い立つ一冊です。当会でも扱います。是非ご予約下さい。

●事務局便り

*ある全国紙に、米国テロとアフガン空爆の被害者に対する国内での寄付金の内訳が出ていた。それによると、ニューヨークの被害者に対して日本赤十字二億五千万、アフガンの被災民に対しユニセフ一億、ペシャワール会八億である。この数字を見て、あらためて会の活動に仮託された人々の思いの強さを感じた。赤十字もユニセフも私たちとは比べようもない国際的な巨大組織である。わずかに二人の専従者(二〇〇一年九月から事務専従者一人、二〇〇二年一〇月から会計専従者一人)と三〇人ほどの事務局員で切り盛りする地方のN-GOに託された思いの背景を考えざるをえない。

*アメリカに象徴されるように、今や大きく強いものはさらに強大になって行く。強大であるだけではなく、それがあたかも正義であるかのように強要され、弱者はその巨大なものに依存せねば抹殺されかねない恐れの中にある。知識人も宗教者も無力を託つのみで、乱世を生きる「知」や「信」を示せずにいる。戦争を欲望し貧困と飢餓をまき散らす巨大な国家を前に、どう生きるのか? 私たちの活動への持続する共感も、そういう自問と無関係ではないように思える。

*世の中の関心は移ろいやすい。マスメディアにつ

いては宿命とも言える。しかし動かぬものもある。そのことを私たちは9・11に始まる一連の世界史的な事件の中で経験することが出来た。そのことが、アフガニスタンで活動を続ける私たちの力の源泉でもある。

ペ村から

今、テレビは北朝鮮とイラクの報道でいっぱい。アフガニスタンの問題はどこかに行ってしまったような印象さえうける。事務局によく顔を出して、現地の情報に比較的触れているはずなのに、ふとそのような錯覚に陥りそうになることがある。やっぱり、毎日毎日のニュースに何が流れているかは、知らず知らずのうちに大きな影響を受けているのだろう。そんな時、ある会員の方と電話で話す機会があった。その方は精力的にペシャワール会のことを、宣伝していらつしやる方で、その方を通して会員になっていただいた会員さんは多い。「ほかの皆さんはどのように工夫して、ペシャワール会のことを知らせてあるのだろう。横のつながりがあるといいな」と。事務局にいると毎週、街頭募金をされているグループ、学級で募金活動している子供達のことなど、大きな励みになっている。情報過多の中で、ペシャワール会を変わらず支援していただいている会員さんを本当に素敵だなと思う。(な)

♪

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のバキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARAH HOUSE (〒八一〇〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号 TEL 七三二一三三七二) 内におく。

—中村哲医師の本—

ほんとうのアフガニスタン

1200円

講演・井上ひさし氏との対談を中心に収録した最新刊です

光文社 東京都文京区音羽1-16-6
電話 03(5395)8125

ダラエ・ヌールへの道

【3刷】2000円

ソ連撤退と援助ラッシュ…2002年の今を思わせる激動の記録

医者 井戸を掘る

アフガン早魃との闘い

【8刷】1800円

医は国境を越えて

【4刷】2000円

ペシャワールにて

【8刷】1800円

ドクター・サーブ

中村哲の15年

丸山直樹 【3刷】1500円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
TEL 092(714)4838

アフガニスタンの診療所から

1200円

筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4
電話 03(5687)2670

価格はすべて本体価(税別)です